

いて論文された2系統の土器、つまり“轟系土器と石坂・吉田系土器”について考察を行っている(大脇 1962)。

その中で大脇氏は、それぞれの系統内での変遷・器面調整・胎土・焼成・色調・分布状況等から、「轟系貝殻文土器と石坂・吉田系貝殻文土器を同一文化の所産とするのが困難であることが理解できるであろう」と述べ、2つの貝殻文土器群の系統の相違を示した。また、2系統の前後関係については「どちらが先に発生したかについては、その初頭の型式が確認されていない現在明らかにしがたいが、或る時期において並行して行われた可能性も多分にある」とし、2系統内における一部の同時性を示唆している。

さて、大脇は石坂式土器の器形・文様を次のように説明している。

まず器形については、「この土器の口縁は波状口縁を呈して、頸部は、く字状に屈曲化し、胴部は些かの膨らみもせず底部に達し、底部は平底を呈する深鉢型を基本形態とするものようである。一部には尖底も認められるが、これらの型式に伴うものか、別型式のものか判断としない」と述べている。これは型式設定者である河口の定義を踏襲するものであるが、新たに口縁が波状を呈するという特徴が加えられ、また、尖底が石坂式土器の範疇に含まれるものかどうかについても、慎重な態度を示している。尖底の存在が、石坂式土器の編年上の位置づけに大きな意味を持っていたことを考慮すれば、重要な指摘であるといえよう。

文様については、河口の定義とはほぼ同じであるが、貝殻条痕について「轟系貝殻文土器に認められたところの地文としての要素は薄く、明らかに意匠文としての役割を果たしている」と述べ、石坂式土器の胴部に施される縦杉状の貝殻条痕を文様の一つとして認めている。

以上のように、大脇の考察は、南九州の石坂・吉田系貝殻文土器を轟系貝殻文土器と比較するという初めての試みであったが、これはアカホヤ火山灰前後に存在する貝殻条痕をもつ土器の比較研究に通ずるものでもあった¹⁾。

同様に、石坂式土器を轟式土器との関係から論じたものに江坂輝彌が『考古学ジャーナル』誌上に連載した「(入門講座)縄文土器—九州篇 [3]—」がある(江坂 1966)。

江坂は、轟式土器の中でも松本雅明等のいう貝殻条痕を縦杉状に施した轟A式土器(松本・富樫 1961)との比較を行い、「器形、文様から見ると、轟A式土器は石坂式土器に先行する形式のように思われるが、今後西南九州方面の両形式土器を層位的に出土する遺跡の発見を俟って実証したいものである」と述べ、石坂式土器、轟A式土器を早期後半に位置づけた。

江坂の論考と前後するが、『日本の考古学』で九州東南部を担当した賀川光夫は、尖底と平底が混在する石坂式土器をヤトコロ式併行とし、早期末に位置づけている(賀川 1965)。また、石坂式土器の源流については「轟貝塚下層出土の尖底条痕文土器があるいはその根元とも推定されて

いるが、今日まだその問題についてふれることは早計である」と轟式土器との関係については慎重な扱いをしている。

その後、石坂式土器の形式設定者である河口は、「塞ノ神式土器」と題する論文を発表し、南九州の縄文時代早・前期の土器文化をまとめているが、その中で石坂式土器についても、その系統を中心に若干述べている(河口 1972)。

“九州縄文土器早前期編年・文化系統表”と名付けられた表によると、石坂式系統の流れを「石坂→吉田→前平→石坂変形→円筒形条痕文」と編年している。これについて河口は「石坂式系統の文化は吉田式・前平式を経て石坂式から変移したと思われる円筒形平底で口縁下に横位の把手を有する土器が現れる。貝殻條を用いて口辺部には横位、胴部には縦杉状の連点文を施し、口唇部にも同様の施文のある型式である。さらにこれに後続して同じく円筒形を基本形としているが胴部が僅かにふくらみを持ち底部へ細くなった平底土器で、口辺部へ横位の貝殻条痕を施した、胴部は無文の土器が出現する。(中略)貝殻施文具を押し引きすることによって条痕中に刻みを生じたもので、口辺部に施文具2幅の文様が施されている。この施文法は吉田式に見られるもので、吉田式の後続形態であろう。円筒形の系統はこの時期で終息するものと思われる」と説明している。

石坂式土器、吉田式土器は前述の論文で、前平式土器もそれに続く古い段階から知られていたが(河口 1955b)、ここで初めて石坂変形土器と円筒形条痕文なる土器が登場したことになる。特に注目されるのは“石坂式から変移したと思われる”石坂変形土器の存在である。これは鹿児島郡吉田町に所在する小山遺跡から初めて出土した土器であるが、その後、種子島西之表市の下割基遺跡で大量に出土したのをはじめ(西之表市教委 1978)、宮崎県南部から大隅半島を中心に資料の増大している土器である。

(2) 逆転編年案の登場とアカホヤ火山灰

河口を中心として進展してきた貝殻文円筒土器の研究であったが、別府大学考古学研究室の賀川等は『考古学論叢』第4号において九州の円筒土器文化を特集した。その中で弥栄久志が「鹿児島県の円筒土器」と題する論考を発表し、石坂式土器を“円筒貝殻文土器”の一つとして取り上げ検討している(弥栄 1977)。

それによると「口縁部はふくらみを持ち外反する。胴部は円筒状をなし底部は平底となる。底部には尖底をもつものもある。施文としては口縁部に刻目文、口縁外面に貝殻腹縁による羽状、斜状の連続刺突文、胴部は縦杉状の浅い条痕、底部は横走の条痕を施している」と、まずは石坂式土器の基本形を説明し、さらに「石坂式土器は器形的に2つのタイプ、論文上からも2つのタイプが考えられる。前者は口縁部の外反するもの、や、外反するものに分ける。そして外反するものには口縁部肥厚が目立つ。施文上の特徴としては元来縦杉状の地文をもつ条痕タイプと刺突の地文をもつ刺突タイプに分けられる」と述べ、器形・文様の